

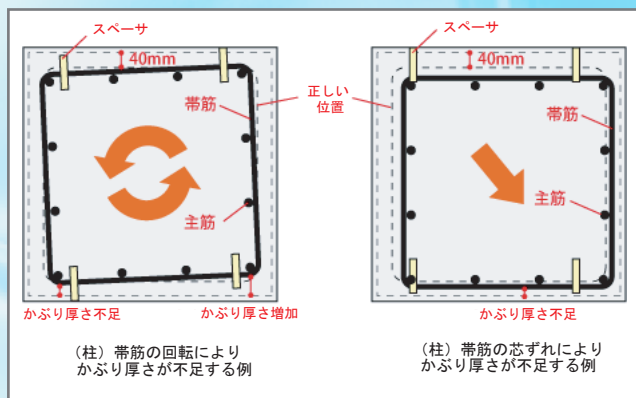
JASS5 の改定

2009 年 2 月に改定された日本建築学会「建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5 鉄筋コンクリート工事 2009」では、これまで主に、型枠脱型後の外観検査によって確認されていた構造体コンクリートのかぶり厚さについて、新たに、かぶり厚さ不足の兆候が認められた場合、非破壊検査によって確認することが規定されました。また、同仕様書では、JASS 5 T-608：2009「電磁誘導法によるコンクリート中の鉄筋位置の測定方法」または、同等の精度で検査を行える方法に従って、鉄筋位置を測定することが規定されています。

かぶり厚さが不足しやすい箇所

下図に示すように、コンクリートの打ち込み中にスペーサーやパーサポートが外れて、鉄筋位置がずれたり、型枠が変形したりして、所定のかぶり厚さが確保されない場所が生じます。一般的には以下の箇所ではかぶり厚さ不足となる可能性が高いと言えます。

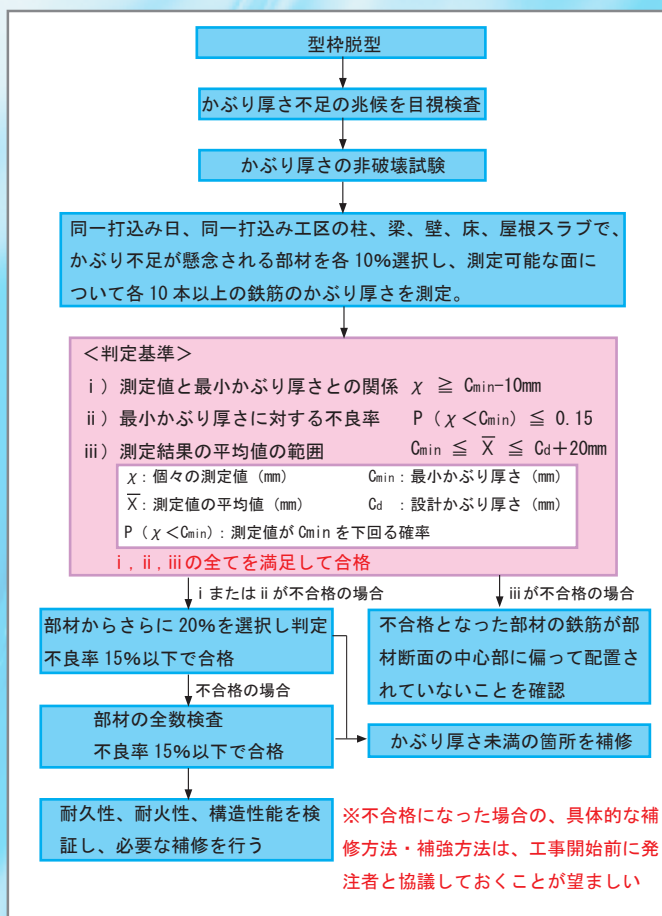
- (1) 部材の下面とその隅角部や端部
- (2) 部材が交差する配筋密度が高い部位
- (3) 鉄筋の継手・接合箇所および定着筋周辺



探査状況（使用機器：フェロスキャン）



探査状況（使用機器：プロフォメーター）



かぶり厚さの検査法フロー

なお、かぶり厚さなどの配筋調査法としては、この他に電磁波レーダ法（RCレーダ等）があります。しかし、型枠脱型後はコンクリートの含水率が急速に変化するため、測定精度が比誘電率に左右される電磁波レーダ法で JASS 5 T-608 と同等の精度で検査を行うためには、その含水率も精度よく測定する必要があります。